

vol. 03

# 家族の献身的な支えと栄養で がんを押しのける。

「がん」は、日本人の二人に一人がかかるほど多く身近な疾患になってきています。でも、いざがんと宣告された瞬間、患者の精神状態は極度に追い込まれる場合が少なくありません。それまで健康で、あまり病気と縁がなかった人ほどその傾向が強いようです。きょうは、そんな患者さんのお話をご紹介したいと思います。

## 陽性反応の9割以上は「良性腫瘍」

60代の女性・J子さんは、60代になると大きな病気をしたことがなく、入院経験は小学校の時の盲腸の手術と、出産前についた程度で、健康状態はいたって良好だと思っていました。体形的には細身で、どちらといえれば食生活も質素。糖質は極力摂取せず、お酒も普段はめったに飲みません。ただ本人曰く「先天的に、ややインシュリンの出が悪い」らしく、それが関係しているのかどうか毎年の健康診断で

は、糖尿病の「境界型」と診断されました。

2019年夏、かかりつけ医から「大腸がん検診」をすすめられ、検査の結果「陽性」だったことから、改めてその病院で精密検査を受けました。J子さんは、その時からなんとなく胸騒ぎを覚えていましたが、医師から「丈夫。検査結果は約95%が良性腫瘍ですから、そう心配はいらんでしょう」と告げられ、安心していました。

ところが、結果は「悪性腫瘍」で、ステージ2。J子さんは近くのM病院

を紹介され、入院して手術を受けることになったのです。

## がん告知でウツ状態に陥る

がん患者となつたJ子さんは、ショックでその日から人が変わったように落ち込んでしまいます。医師から「大丈夫ですよ。手術して治療すれば必ずよくなります」といわれても、「もう歳だし、長生きできないのかもしれません」と口にするようになります。がんの一番の難敵は、実はこうした精神

面や感情面の落ち込み、ウツ症状だとわれます。まさにその状態に陥ってしまうのです。

M病院の手術前検査で、大腸がん以外にも「副腎腫瘍」や「肺に陰がある」と指摘されたことも、ショックに追い討ちをかけました。J子さんの夫から相談を受けたのはちょうどそのころです。J子さんの夫と私は、仕事を通じて親交があり、どうしたらいいか不安になつたのでしょう。J子さんの夫は、以前から医療と栄養に関心を持つており、「がんとわかつた以上、栄養的に



秋山 真一郎 あきやましんいちろう  
医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授、札幌医科大学卒。  
NPO法人がんコントロール協会理事。  
がん免疫治療と植物栄養を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。



## 栄養と家族のサポートが「良薬」

J子さんの手術は、11月上旬に無事終了。経過は良好で、入院から20日

何ができる手立てはないか」と打診してきたので、次のように答えました。「ビタミンBとEPAが不足していると思う。それに加えて抗酸化作用のあるキャベツなどアブラナ科の野菜、レモンなども積極的に摂った方がいい。免疫力も低下しているので、まずは栄養で体質を変えることだ」

J子さんの夫は、私の提案をすぐに取り入れ、さっそく次の日から「特製ジュース」を作つて飲ませます。彼に聞いたところ、そのジュースは「りんご、バナナ、人参、セロリ、小松菜、レモン」をミキサーにかけて作ったスムージーで、がんの食事療法で有名な済陽先生の本を読んで取り入れたものでした。

私は、このスムージーに、ボタラボグリーンとボタラボキヤロット、ボタラボミネラル77を加えることを提案します。彼はそれもすぐに実行し、手術が行われるまでの約20日間、1日も休むことなくJ子さんにそのスムージーと、ビタミンB、EPAが含まれた食材を徹底的に食べさせたのです。

栄養療法と家族の献身的な支え、私が、がん治療に栄養療法を取り入れる理由はここにあります。みなさんも、栄養や食生活をしっかり見直して健康づくりに取り組んで下さい。